脳神経内科や循環器、リハビリも担当
総合力を兼ね備えた専門医を目指す

DOCTOR closeup

亀田病院医師 齋藤 司

今年4月旭川医科大学第一内科助教から亀田病院に赴任したのが齋藤司医師だ。函館で生まれた齋藤医師は「小さい頃、病気の祖母を治療したい」という思いから医師を志すようになった。

旭川医科大学に進学。将来は精神科医を考えていたが、神経内科の講義を聴講以来、神経内科に惹かれるようになる。卒業後は第一内科に入局。「神経内科医を目指しましたが、第一内科教室は循環・腎・呼吸・神経と内科系で最も幅広い領域を担っています」。第一内科は4つの診療科を均等に勉強するが、それは全身を診てこそ内科医であるとの考え方からだ。神経内科専門医やリハビリ専門医、脳卒中専門医などの資格を有する齋藤医師だが、これは総合力を兼ね備えた専門医の医師像を追及する第一内科でのキャリア形成によるものだ。

2004年には国立道北病院に勤務。同病院は神経難病の患者が多く入院している。「足の筋力低下から歩けなくなった状態でも、かかとを90度に固定する道具を使うと歩けるようになるなど、リハビリの重要性を経験しました」。大学院では心房細動を研究。不整脈の一つである心房細動では脳梗塞予防のために抗凝固薬を用いるが、微小脳出血に関するワーファリンと新しい抗凝固薬とを比較した論文を世界で初めて発表した。

亀田病院では内科や脳神経内科の外来、リハビリも担当している。「神経内科は診察に辿り着くまで時間のかかることが少なくありません。紹介状の必要ない当院のメリットを活かしていきます」。5月には「新型コロナウイルス後遺症外来」を開設、担当している。「新型コロナウイルス感染症には一部で長引く症状があることがわかってきました。外来では後遺症と考えられる症状について診療を行っています」

齋藤医師は「当院ではこれまで自分が勉強してきたことのすべてを活かすことができます」と話す。「患者さんの全身を診るジェネラル・フィジシャン（かかりつけ医）として、十分に時間をかけた問診と診察を行うことで、地域の多くの皆さんの力となれるように努めていきます」

さいとう　つかさ
2003年旭川医科大学卒業。
旭川医科大学病院、国立病院機構道北病院、旭川医科大学第一内科医員、旭川医科大学内科学講座循環呼吸神経病態内科学分野助教を経て、2023年4月亀田病院に赴任。
日本内科学会専門医、日本神経学会神経内科専門医・指導医、日本リハビリテーション医学会専門医、日本脳卒中学会専門医、日本脳ドック学会評議員